

かっこいい酒田の女たち

令和2年 4月4日(土)～8月31日(月)

酒田の開祖は、奥州藤原氏が源頼朝に滅ぼされた時に36人の遺臣とともに、袖の浦（現在の宮野浦地区）に逃げ延びてきた女性「徳尼公」といわれています。今から800年以上も昔、12世紀の終わりのことです。それ以降、酒田の歴史の表舞台に女性が登場することはありません。

しかし明治時代を迎えた日本に文明開化の波が押し寄せると、酒田でも女性の社会進出が始まり、新しい職業のパイオニアとして活躍する女性や、文化・芸術分野で才能を開花させる女性が現れます。山居倉庫の女丁持ち、かごを背負って魚を売り歩いたアバに代表されるように、市井で力強く生きた女性たちも数多くいました。

本企画展では、江戸に生まれながら酒田の女性教育者の草分けとなった小川宮子、今なお多くの人に愛され続けている酒田出身の歌手・岸洋子など、明治、大正そして昭和の時代に活躍した酒田ゆかりの女性たちを、有名無名を問わず紹介します。

江戸時代以前の女たち

酒田の創始にまつわる女性「徳尼公」の伝説

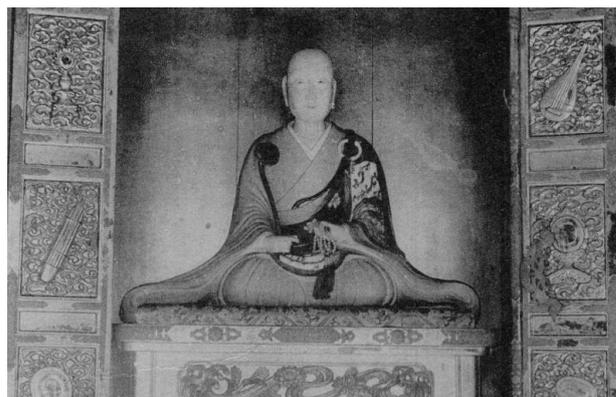
酒田の町は、古くは「向う酒田」と呼ばれる最上川南岸の袖の浦（宮野浦）にあった。12世紀の末、三代百年の栄華を誇った平泉藤原氏が源頼朝に滅ぼされた時、藤原秀衡の妹・徳の前、あるいは後室・泉の方ともいわれる女性が、36人の遺臣とともに袖の浦に落ち延びてきたのが、その始まりといわれている。

平泉からは鳴子温泉、瀬見温泉を通り、秋田を回って庄内に入り、藤原氏の戦死者を弔うために秋田の白馬寺で髪を落として尼になって、「徳尼」と名乗ったともいわれている。

しばらく羽黒山に近い立谷沢の妹・沢いもとざわに暮らしていたが、頼朝が羽黒山の霊場修復のために使者を遣わすようになったため、袖の浦まで逃げ、飯森山のふもとに建てた「泉流庵」で藤原一門の冥福を祈りながら余生を送ったという。

その後、36人の遺臣は地侍として船問屋を営み、地元民の先に立って湊の繁栄を支えた。また、長人おとなあるいは三十六人衆と称して、湊町の町政を担ったという。

徳尼公は、現在も泉流寺（酒田市中央西町）内の徳尼公廟にまつられ、毎年4月15日には三十六人衆ゆかりの人々が集まり、供養を行っている。



泉流寺にまつられている徳尼公像（大正5年の絵はがき）

平安時代の歴史書に名前がある貞女・伴部小椋賣

平安時代に編纂された歴史書『日本三代実録』に、旧平田町の田沢地区に暮らしていた伴部小椋賣という女性の名前が登場する。内容は、貞観15年（873）6月26日、飽海郡の伴部小椋賣が夫の死後、墓の近くで暮らし、尼となって身を謹んで苦行精進したので、位二階を授けて租（年貢）を免じたというもの

だ。

その2年前の貞観13年には田川郡の大荒木臣玉刀自が、同じ理由で位二階を授かったと記されている。この頃、朝廷は仏教による鎮護国家政策を進めており、小椋賣のような貞女に対する褒賞も仏教推進策の一環だったと考えられている。

小椋賣の没後、村の老人たちはお堂を建てて木像を納めたと伝えられ、木像は現在も旧平田町楯山の小椋賣神社に祭られている。小椋賣にかかわりがあるといわれる小女房^{おによぼう}という地名も残っている。



小椋賣神社(旧平田町楯山)



小女房のバス停(平成24年撮影)

早世し、才能が惜しまれた絵師・伊東梅月 文化11年(1814)～弘化3年(1846)

酒田外野町の内町組大庄屋・伊東伝内の娘として生まれ、桶屋町の白崎善次郎の養女となる。幼少のころから聡明で、絵を鶴岡の氏家剛太夫(龍溪)、酒田の筒井雲泉に学んだ。

文政5年(1822)頃、養母とともに江戸に出て、谷文晁に学び(文晁の門人・文昇との説もある)、浅草門前で辻書きをするなど、絵を書いて母を養った。花鳥・人物・山水画を得意とした。

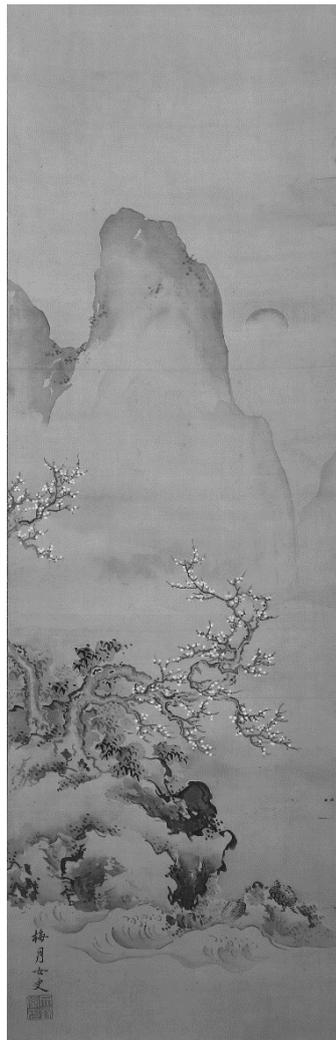
天保5年(1834)、数え21歳の時に庄内に戻ってきたが、江戸で開かれた送別の書画会には700人ものが集まったという。

和歌、俳諧にも長じ、まれにみる才女だったといわれ、鶴岡の文芸家と広く交流した。数え33歳の若さで江戸で亡くなり、酒田の妙法寺に葬られた。

伊東梅月筆

蓬萊之図／江戸後期(向かって左)

冬景山水／江戸後期(向かって右)



力強く働いた女たち

羽越線開設工事に従事した竹内組の女性現場監督

大正3年(1914)12月、陸羽横断鉄道酒田線が開通し、その翌年には酒田駅と最上川駅(現在は酒田港駅)を結ぶ臨港線が開通した。酒田では十王堂町(現在の二番町)にあった竹内組が線路の敷設工事にあたったが、現場監督を務めたのは女性だった。昭和53年(1978)に酒田市が発行した『目でみる酒田市史』には、「竹内組の女親分」と紹介されている。

竹内家の親族であること以外、名前も経歴も不明だが、当時の酒田では名の知れた女性だったのだろう。

写真は、臨港線の工事現場。向かって左下の眼鏡の女性が「女親分」である。ほかにも工事に従事していた女性4人が写っている。



重たい米俵を運んだ山居倉庫の女丁持ち

終戦後に労働基準法が施行されるまで、山居倉庫で重たい米俵を運んだのは女丁持ちだった。舟着き場に着いた舟から1俵(60キロ)ずつ背負って倉庫に運び、天井まで25段の高さに積み上げた。昭和8年から昭和23年4月まで働き、ドラマ「おしん」の撮影にも参加した、最後の女丁持ちの一人・阿部直江さんは生前、当時のことを次のように語っている。

- ◆重労働だったが、米1俵4円、男性の給料が1日50銭だった時代に1日1円もらえて、ありがたかった。
- ◆身元のしっかりした人しか入れなかった。決まりは厳しく、山居倉庫綱領や心得を書いた社員手帳を渡された。
- ◆常時働いていたのは25人。繁忙期には臨時の75人が加わり、100人で働いた。
- ◆年に一度、桜の時期に湯野浜に旅行に行けるのが楽しみだった。

阿部さんは、労働基準法の制定によって退職を余儀なくされたことが「悔しくて残念だった。泣けて仕方なかった」と話していた。女丁持ちの仕事に誇りと生きがいを持っていたことが伝わってくる。



山居倉庫の出庫風景／大正中期
ばんどりで米俵を背負った女丁持たちが蔵出しをする風景。一俵一俵を人力で運んだ。



ドラマ「おしん」のロケ風景／昭和57年(1982)
米俵で半分顔が隠れているのが阿部直江さん。泉ピン子にばんどりの背負い方や仕事の進め方などの指導も行った。



山居倉庫の女丁持ち／昭和7年(1932)

新鮮な魚を売り歩いた浜のアバ

庄内一円の漁村から新鮮な魚の行商に来る女性たちを「浜のアバ」と呼んだ。

昭和のはじめまでは、川北の高砂や小湊から「ぼで」と呼ばれる振りかごを肩に担いだアバが、光ヶ丘の松林を歩いて、酒田の町まで行商に来ていた。川南の宮野浦からは渡し船でやってきた。

大正13年(1924)に羽越線が全線開通するとアバの販売範囲が広がり、アバ専用列車も登場した。戦後の食糧難の時代には、リヤカーで魚を売りに来るアバが庄内の食卓を支えたが、スーパーマーケットの進出などにより衰退した。



宮野浦から酒田に魚を売りに来たアバを乗せた渡し船／年代不明
※展示はしていない写真です。

教育・福祉に尽くした女たち

酒田の女性教師の先駆けとなった小川宮子

文政7年(1824)～明治33年(1900)

江戸旗本の娘として生まれる。幼少のころから才気煥発で、和漢の書や礼法を学んだほか、茶道、華道、箏曲など広く諸芸にも秀で、裁縫、料理に至るまで家のこともできた。そのかたわら剣術もたしなんだという。

幕府の御殿医・小川希道に嫁いたが、維新後に未亡人になった宮子は、明治5年(1872)48歳の時に、宮野浦村の素封家・佐藤東次郎に請われて宮野浦に移住。村立集会所で寺子屋を開き、同7年に宮野浦学校(現在の宮野浦小学校)ができるのと教師になる。

明治8年(1875)、酒田県令・三島通庸に認められ、酒田最初の女学校である操松学校(後に琢成学校に統合)に、創立と同時に招かれた。同11年に山形県師範学校(後の山形大学教育学部)が創立すると、三

島の命により、同校附属小学校に勤務した。同15年から17年まで東置賜郡高島村屋代小学校に勤めた後、当時三島が県令を務めていた栃木県の大田原町に移り住んだ。ここでも私塾を開き、女子だけでなく男子に漢文や剣術を教えて晩年を過ごした。

常に紋服を着用し、白襟縞の襦高袴まらたかばかま、切り髪という男装だった。酒田で教えたのは6年だったが、酒田の女子教育の発展に大きな功績を残した。享年77歳(数え)。

昭和6年(1931)、操松学校で宮子に学び、教師として活躍した安部(旧姓時岡)条らが発起人になり、林昌寺境内に功労碑を建立した。



女子教育に情熱を傾け、天真学園を設立した斎藤辰

明治18年(1885)～昭和46年(1971)

松嶺町本町(旧松山町)生まれ。明治36年(1903)、小学校時代から得意だった裁縫を学ぶために北海道に渡り、札幌女学館に入学する。市内の良家で家事見習いをしながら料理、作法、生け花、茶道なども学んだ。卒業し帰郷した辰は、酒田町北千日堂前に住み、自宅で近隣の娘たちに裁縫を教えるようになる。

その後、山形の裁縫学校を視察して学校経営などを学び、大正12年(1923)、浄徳寺の部屋を借りて斎藤裁縫塾を創設する。縫製技術にとどまらず、家庭一般の総合的な知識・技能の修得を目指し、同14年には本間家6代光美の弟・光勇の厚意により、酒田駅前に移転し、酒田裁縫塾と改称した。

この年、皇太子(後の昭和天皇)が酒田を行幸した際には、丹前や浴衣を縫って献上している。

昭和2年(1927)には私立学校の認可を受け、夫・斎藤又治を校主とする酒田裁縫女学校を設立する。戦時中の昭和18年(1943)に酒田家政女学校と改称。その翌年に校舎が軍需工場に転用され、生徒募集の中止を命じられるという苦難に見舞われた。

しかし昭和21年(1946)、又治と辰が私財を寄付して財団法人酒田天真学園を設立し、学校を再開。後の天真学園高校(現在は酒田南高校)へとつながっていく。

教え子たちに対しては厳しく指導したという辰。その一方で慈愛を持って支え続け、母親のように慕われていたという。享年85歳。



「愛児の家」をつくり戦災孤児を育てた石綿さたよ

明治30年(1897)～平成元年(1989)

松嶺町(旧松山町)の旧松山藩士・長岡与五右衛門の家に生まれる。大正のはじめ、仙台に暮らす叔父の家に行儀見習いに行き、大正7年(1918)に仙台高等女学校(現在の仙台白百合女子大学)を卒業。叔父の世話で東京・駿河台の病院で看護婦見習いになる。

大正15年(1926)に石綿金太郎と結婚し、夫婦で経営した石綿商店が書籍の装丁用の織物を扱う事業で成功を収めた。昭和14年(1939)中野区鷺宮に移転。二女が小学校に入ったのをきっかけに校外生活指導を始めた。

太平洋戦争終結後の昭和20年(1945)、知り合いが男児を連れてきたのをきっかけに、数人の仲間と「戦災孤児救護婦人同盟」を設立し、戦災孤児を自宅で保護するようになる。翌年、「愛児の家」と名付け、同23年からは戦災孤児以外の子どもの収容も始める。その人数は、この年だけで80人にのぼっている。

こうした功績により、昭和44年(1969)に勲六等瑞宝章を受章し、同55年には名誉都民に選ばれた。愛児の家をモデルにした連続テレビドラマも放送された。生涯で育て上げた子どもは1,000人を超えるという。

現在も「愛児の家」は社会福祉法人として、子どもたちの養護・育成を行っている。



松山文化伝承館提供

多彩な職業の先駆けとなった女たち

女性飛行士の先駆けとなった本登勝代

明治39年(1906)～昭和58年(1983)

上田村大字上野曾根の宮大工・本登重太郎の三女として生まれ、北平田小学校を卒業後は、姉の嫁ぎ先だった上田村安田の安部医院で看護婦の仕事をする。好奇心旺盛で運動神経が良く、医院にあったバイクを乗り回していたという。

大正14年(1925)、助産婦の資格を取るが、新聞で女性パイロットの木部シゲノの記事を見て、自分もパイロットになろうと思い立った勝代は、義兄の支援を受け昭和2年(1927)に群馬県



飛行機に乗った勝代と同郷の親友・阿曾勝美／昭和4年(1929) 個人提供

前橋の第一航空学校に入学する。同年11月に開催された山形県飛行大会では、練習生であったため操縦はしていないが、大浜海岸まで郷土訪問飛行している。

翌年、東京都立川の日本飛行学校に転校し、昭和4年(1929)に三等飛行機操縦士の試験に合格、第88号の免許を取得した。免許取得後に酒田に飛んできたことがあったというが、時期は不明である。翌年には日本飛行学校研究科に進学したが、昭和8年(1933)、鶴岡市出身の軍人パイロット・佐藤正と結婚し家庭に入った。

まだ女性は二等飛行操縦士までの免許しか取れず、活躍の場がほとんどなく、途中でやめる人も多かったという。勝代もそんな時代を生きた女性飛行士の一人であり、この地方の人々に大きな刺激を与えた。後年、飛行機の爆音を聞くと我慢ができず、夫にせがんで飛行機に乗せてもらったという。享年78歳。

山形県で初めてナイチンゲール記章を受けた阿部八重

明治31年(1898)～平成5年(1993)

上田村大字吉田の医師の家生まれる。大正8(1919)、日本赤十字社本社病院救護看護婦養成所(現在の日本赤十字中央女子短期大学)を卒業し、4月から同病院に勤務する。

大正14年(1925)には、民間で初めて宮内省侍医療の嘱託となり、昭和23年(1948)まで務める。現在の昭仁上皇など4人の内親王と2人の親王の出産の際に、主治医の手伝いをしている。

大正15(1926)に日赤本社病院看護婦長となり、戦時下の昭和12年から13年(1937～38)には中国で、将兵の看護や現地難民の救護に当たった。

昭和23年(1948)、横須賀市の国立久里浜病院附属高等看護学院の設立に携わり、同校の教務主任として後進の指導に当たる。同病院の初代看護婦総婦長も務めた。

昭和33年(1958)の定年退職後は酒田に戻ったが、日赤本社の強い要請を受けて、翌年から昭和41年(1966)まで横浜赤十字病院の看護部長として勤務。日本看護婦協会代表なども務め、戦後の看護婦制度整備にも貢献した。退職後は酒田で暮らした。

昭和38年(1963)、看護師に与えられる世界最高の荣誉である「フローレンス・ナイチンゲール記章」を山形県で初めてを受章。ほかに黄綬褒章、勲五等瑞宝章などを受けている。享年95歳。



上田の三女傑

本登勝代と阿部八重は、同じ上田村出身者である。酒田市内の町村の歴史などをまとめた『酒田の今昔』(佐藤三郎著)の「上田」の項では、「上田村から出た人物を探ると女性が目につく」として、この2人を取り上げているのだが、さらにもう一人、勝代の親友である阿曾勝美が紹介されている。

それによると、勝美は昭和の初めに自動車免許を取り、個人タクシーを開業。戦後は昭和25年(1950)まで上田村の消防自動車を運転した評判の女性だった。この本が出版された昭和49年(1974)当時、酒田地区交通安全協会の婦人部長を務めている。

地元では「上田の三女傑」と称されている。梓にとらわれない生き方をした勝代と勝美が仲良くなったのも、うなずける話である。



佐藤三郎著『酒田の今昔』／昭和49年(1974)

フランスの服飾技術を日本に導入した原のぶ子

明治34年(1901)～平成9年(1997)

松嶺町南町(旧松山町)に生まれる。尋常小学校の教諭をしていたが、大正14年(1925)に向学心と職業婦人へのあこがれから、共立女子職業学校(現在の共立女子大学)へ進学。卒業後は同校に勤務し、被服の世界に身を投じていく。

昭和9年(1934)、文部省の依託を受けて渡仏し、服飾デザインを学ぶ。パリには画家である夫とともに滞在。アトリエも持ち、その後の基盤となる洋裁知識を深めたが、昭和14年(1939)、第二次世界大戦の開戦により帰国。日本で初めて、「フランス式立体裁断法」や「フランス式洋裁教育」を導入した。

昭和17年(1942)に「原のぶ子アカデミー洋裁」(現在は青山ファッションカレッジ)を設立。同29年(1954)には、デザイナーの団体「サロン・デ・モード」を創立し、日本初のファッションショーを開催するなど、人材育成に尽力した。米沢女子短期大学の名誉教授なども務めた。

昭和30年代(1955～)からは化学繊維を利用した洋服を多く手掛け、生活スタイルの欧米化によって変化した日本人の体形に合わせた、さまざまな年代の女性に向けた洋服を作り続けた。

昭和51年(1976)、勲五等瑞宝章を受章。同61年(1986)には故郷の松山町でファッションショーを行い、翌年に松山町名誉町民第一号となった(現在は酒田市名誉市民)。享年96歳。



松山文化伝承館提供

明治の酒田で写真師として活躍した池田真佐

生没年不明

酒田に最初の写真館ができたのは明治18年(1885)頃。白崎民治、家坂徳三郎が草分けといわれている。それに続いたのが、明治25年頃に下台町(現日吉町)で「玉影館」を開業した女流写真師・池田真佐といわれている。

玉影館は、庄内地震が発生した明治27年(1894)に酒田を訪れた写真師・若林安松が跡を継いで、若林写真館として戦後まで続いた。

真佐がどんな人物で、写真自体が珍しかった時代にどこで撮影技術を学んだのかなど、その経歴は不明だが、真佐の名前が入った写真が現在も残っている。



池田真佐が撮影した酒田の女性の写真／明治

芸道に生きた女たち

北前船の時代から続く酒田花柳界の芸妓の歴史

酒田の芸妓の歴史は、北前船時代の遊所から始まった。北前船の寄港地として栄えた酒田には今町、船場町、高野浜(新町)の三遊所があり、今町は江戸時代後半に出された全国の遊所番付で東前頭七枚目になっている。

芸妓の歌や踊りなどの芸能も今町から始まったと考えられている。はじめは江戸の旅芸人からもたらされ、次第に地元から師匠が現れたのだろう。

明治時代になると、東京で浄瑠璃、常磐津、三味線、踊りを学んで帰郷した吾妻屋辰枝が、芸妓の置屋を営みながら指導者として活躍した。新町の芸妓に藤間流の踊りを教えたことで知られている。辰枝の姪にあたる今咲屋咲江も師匠として数百人の門弟を育てている。今咲屋で芸を仕込まれた小野定江などの名妓が育ち、北前船のにぎわいが消えてからも、酒田の花柳界の評判は高まっていった。

大正から昭和はじめの最盛期、芸妓の人数は100人を超え、大正4年に開催された鉄道開通式典では、148人の芸妓が踊りを披露している。

戦後、料亭文化の衰退とともに芸妓の後継者もいなくなったが、平成2年(1990)に町おこしの一環として「舞娘さん制度」がつくられ、酒田舞娘として復活。歴史ある酒田の芸能を今に伝えている。

酒田の芸道を隆盛に導いた今咲屋咲江^{いまさきやさきえ}

安政2年(1855)～大正15年(1926)

酒田今町(現在の日吉町)の料亭・今咲屋に生まれる。後に旅館となった今咲屋の主人となり、舞踊、箏曲の師匠として多くの門下生を指導。酒田の芸道の隆盛を導いた。詩歌、俳句、囲碁、将棋、書画にも通じ、来酒した名士の席に連なって、県外にも名前が知られていた。

踊りは藤間流、箏曲は山田流の免状を受けているが、大正8年(1919)には、咲江がその踊りの新しさに魅せられたという花柳流寿三郎を酒田に招き、花柳流を伝えている。叔母である吾妻屋辰枝が藤間流を指導した新町の芸妓、咲江が花柳流を指導した今町の芸妓は、お互いに芸を競い合った。

享年72歳。没後の昭和7年(1932)、善導寺の境内にその功績をたたえた石碑が、門下生たちにより建立された。



酒田の花柳界が隆盛を極めた戦前の芸妓／昭和(戦前)
戦前、新町(現在の南新町)の俵屋で子どものころから芸を学び、人気の芸妓となった金太郎。



軍服の縫製工場で働いた戦時中の芸妓たち／昭和19年(1944)

終戦の前年。この頃には一億総決起が叫ばれ、女性や子どもたちも戦争を支えるために働かされた。芸妓も例外ではなく、軍服の縫製工場に動員された。その時に下日枝神社の前で撮影した記念写真。

芸術・文化の世界で活躍した女たち

庄内の働く女性を描いた戸田みつき

明治39(1906)～平成8年(1996)

飽海郡観音寺村(旧八幡町)に生まれる。大正12年(1923)に酒田高等女学校(現在の酒田西高)を卒業後、日本画家・結城素明に師事し、東京女子美術学校(現東京女子美術大学)に入学する。

卒業後は大分県大分市の岩田実科高等女学校(現在は岩田中学校・高等学校)に勤務した。

昭和5年(1930)、第7回白日会で入選しているが、このころは西荻窪に住み、若くして亡くなった酒田出身の画家・小野幸吉とも交流があった。

その後、日本画から洋画に転向し、昭和38年(1963)に武者小路実篤が創設した大調和展に出品。翌年には会員に推挙され、同45年(1970)に同展の会員佳作金賞を受賞した。昭和43年(1968)に本間美術館で個展を開いた際には、武者小路実篤が推薦文を書いている。

杉並アマチュア美術連盟の指導者としても活躍し、昭和51年(1976)には70歳でアメリカを訪れ、各地で写生して回った。

ハンコタンナ姿の女性など働く庄内の女性、鳥海山など庄内の風土をテーマにした作品を多く描いている。享年90歳。



(公財)本間美術館提供

岸洋子をはじめ多くの音楽家を育てた加藤千恵

明治37年(1904)～平成3年(1991)

酒田筑後町に生まれる。幼いころは北海道に暮らし、小学3年生の時に酒田に戻っている。

大正9年(1920)、酒田高等女学校(現在の酒田西校)を卒業し、東京音楽学校(現東京芸術大学)甲種師範科に進学する。卒業後は大阪府立寝屋川高等女子学校(現在は寝屋川高校)、京都市立堀川高等女学校(現在は堀川高校)に勤務。音楽活動にも精力的に取り組んだ。

昭和15年(1940)に宝塚歌劇団声楽主任に就任。同18年(1943)にNHK大阪中央放送局の囑託として同局放送合唱団の指導に当たった。

終戦直後に酒田に戻り、昭和21年(1946)に浄福寺の本堂を借りてボーカルスタジオを開設。酒田の子どもたち、社会人に声楽、合唱、ピアノを指導し、音楽の普及、後進の育成に取り組んだ。岸洋子、酒田市名誉市民のテノール歌手・市原多朗氏もその門下生である。

昭和31年(1956)には、東北地方では初めてと思われる市民オペラ「ミカド」を上演し、酒田の音楽水準の高さを全国に知らしめた。

昭和40年(1965)に斎藤茂吉文化賞を受賞。同62年(1987)には酒田市名誉市民となった。享年87歳。



ボーカルスタジオ提供

歌を愛し、故郷を愛した岸洋子

昭和9年(1934)～平成4年(1992)

酒田市八軒町(現在の新井田町)に生まれる。子どものころから歌が得意で、加藤千恵に才能を見出されレッスンを受ける。

酒田東高校卒業後、オペラ歌手を目指して東京芸術大学声楽科に進学するが、病を得て断念する。療養中に聞いたエディット・ピアフの歌に魅了され、芸大を卒業した翌年の昭和34年(1959)、多くの文化人が集まったことでも知られる銀座「銀巴里」でデビュー。シャンソン歌手としての道を歩んだ。

昭和37年(1962)、『たわむれないで』でレコードデビュー。同39年には『夜明けのうた』が大ヒットし、レコード大賞歌唱賞を受賞。NHK紅白歌合戦初出場を果たした。

卓越した歌唱力、表現力は日本中の人々の心をつかみ、多くのヒット曲を世に送り出した。昭和45年(1970)の『希望』は、翌年の春の選抜高校野球大会の入場行進曲に選ばれた。



岸洋子の病は難病といわれる膠原病であり、その歌手人生は平たんな道のりではなかったが、平成4年(1992)に58歳で亡くなるまで精力的にステージに立ち続けた。昭和44年、同59年には文化庁の芸術祭優秀賞を受賞している。

昭和51年(1976)の酒田大火後には、全国各地でチャリティコンサートを行い復興のために尽力。紺綬褒章、酒田市特別功労表彰を受けている。

←イタリアのサン・レモ音楽祭で歌う岸洋子

／昭和43年(1968)

イタリアで毎年開催されているポピュラー音楽の祭典。岸洋子は、『今宵あなたが聞く歌は…』を歌い入賞した。

泉鏡花文学賞を受賞した森万紀子

昭和9年(1934)～平成4年(1992)

酒田市本町に生まれる。本名は松浦栄子。

昭和28年(1953)に酒田東高を卒業。同窓生に成田三樹夫、岸洋子がいる。

卒業後は上京し、誌社に勤務しながら小説を書いた。昭和40年(1965)に『単独者』が文学界新人賞の佳作に選ばれ、芥川賞候補になる。

さらに同年の『距離』、昭和44年(1969)の『密約』、同46年(1971)の『黄色い娼婦』が芥川賞候補になる。いずれも受賞こそ逃したが、黄色い娼婦は同世代の評論家から芥川賞作品以上に高く評価された。

昭和55年(1980)、初の書下ろし長編『雪女』が第8回泉鏡花賞を受賞した。

寡作ではあるが、幻想的な作風の個性派作家として活躍し、戦後の山形で最も優れた女流作家と評された。享年58歳。



文芸の才能に優れ、激しい恋情に生きた菊池リウ

明治25年（1892）～大正11年（1922）

浄福寺住職・菊池秀言の三女として生まれ、父が東本願寺に勤めた関係で3歳まで京都で育った。

明治37年（1904）、酒田高等女学校（現在の酒田西高校）に入学。りう子（柳子）のペンネームで、在学中から学校文芸誌や女子向け文学雑誌「女子文壇」に投稿していた。女子文壇ではたびたび入選し、酒田高女を卒業した明治41年（1908）に出版された同誌臨時増刊号「文壇の花」では顔写真入りで紹介されている。

当時、女子文壇の選者を務めていた詩人・横瀬夜雨にあこがれ、文通を経て親密になるが、明治42年（1909）、数え18歳で陸軍少尉・高橋良吉に嫁ぎ、浜松に移り住んだ。結婚後も夜雨への思いを断つことができず、離婚騒動も起こしているが、大正2年に決別している。その後、病に倒れたリウは数え32歳の若さでこの世を去った。

